

京都琵琶協会九月定例茶話会

九月十一日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅。三十四度という真夏に似た厳しい残暑を克服して平井、木村維水、桜井旭富、荒木旭援、古谷寛水、牧南水、安住旭富、山岡旭清、矢吹旭美津、梅原旭濤、田中勝水、戸田旭公、馬場鴨水、伊吹正陽、植村寛水の各流派男女会員が冷房のよく利いた二階座敷で左の通り演奏のあとビールで乾盃、夕食を共にしながら十二月十一日開催の演奏会の打合せなどをし七時半和やかに散会した。

藤巻旭鴻演奏会

九月十八日(日)昼十一時東京千代田区大手町農協ホール、司会三遊亭円窓外(千円)。旭鴻会創立四十五周年を記念し各流派名手数氏応援出演、各曲目の内容を解説した美事なプログラムを配布して聴衆を喜ばせた。秋の草花一全員◆王昭君◆藤巻旭祐、初谷旭憲◆絃二、琴一◆粟津の露◆大西旭好◆絃二、笛一◆秋風故郷◆林田旭史◆内田旭章◆絃二、笛一◆華道華の恵み◆黒田旭映◆絃三、生花四◆吉野山麓◆古南崎旭薫◆絃四、笛一、立方一◆羅生門◆藤巻旭彰、古川旭神◆絃旭鴻◆網館一熊手旭登、藤巻旭陽、藤巻旭鵬◆絃三◆関ヶ原◆木庭旭山◆若き教盛◆柿木旭利◆絃三、笛一、立方◆茶道松風の曲◆大津旭紅◆口◆輝錦◆千姫◆富樫旭桂◆絃一、語り一◆白虎隊◆仲川秀邦◆坂崎出羽守◆原島旭粧◆井伊大老◆都錦穂◆唐人お吉◆横野旭風◆絃三、笛一、立方◆汐風乙女◆藤巻旭祐

初谷旭憲◆絃七、笛一、立方◆黒塚一吾妻江風◆舞扇鶴ヶ岡◆柴田旭堂◆南部坂一會主藤巻旭鴻◆特別出演印度舞踊二人◆新琵琶楽荒城の月交奏曲◆琵琶二十三人◆琴一、笛一。西郷南州百年記念薩摩琵琶演奏大会 九月二十三日(日)昼一時一六時鹿兒島自治会館ホール、南州神社崇敬会、薩摩琵琶同好会共催。(次号詳報)

錦心流琵琶演奏会

九月二十五日(日)正午鯖江市市民会館二階大広間、福井県文化協議会、一水会福井支部共催。(次号詳報)

ラヂオ琵琶放送

九月一日(日)午後三時NHK・FM。花の教盛◆藤波桜華◆白虎隊◆座間桜水両女史。

予告

○秋の琵琶名流公演 十月二日(日)十一時名古屋市中須中小企業福祉会館六階ホール、主催阿部勝水女史。会員七、応援十三氏の外東京前田秋声、輝錦、鈴谷六水、都錦穂、大原小川吟水、京都平井春嶺、名古屋石河旭豊の各流派名手来賓出演。○京都琵琶協会十月定例茶話会 十月十日(日)十一時、会員矢吹旭美津女史宅。○筑前琵琶橋会全国大会 十月二十二、三(日)両日北九州市戸畑地区橋会司会。○第十六回琵琶と詩吟詩舞の会 十月二十三日(日)正午西宮市夙川公民館松下ホール、共催一水会神戸支部、蓮水会(会長三浦蓮水女史)。西宮市文化祭参加。会員の外東

京水藤五郎、静岡太田杯水、名古屋三輪純水、京都平井春嶺の各名手ゲスト出演。又原義人氏一門の琵琶舞や詩吟など盛沢山。○筑前琵琶橋会全国大会 十月二十八、九(日)両日朝十時神戸市市田区下山手五の県民小劇場。司会神港旭会(会長長田旭堂女史)。二十八日四十三曲、二十九日四十曲、東西の旭会選出会員數十名が研を競う。○故郷恋水、故郷原英水両氏追悼錦心流琵琶演奏会 十月三十日(日)昼十二時半大阪西区北堀江御池通五丁目一西區民センターホール(梅田から地下鉄御堂筋線難波駅にて最後の階段を上り千日前線に乗り換えて西長堀下車、地上に出て直ぐ、図書館の隣り)主催一水会大阪支部(支部長小川吟水氏)。会員の外東京谷暉水、松岡蓮水、大阪広瀬敏水、野尻撰水、神戸三浦蓮水、京都馬場鴨水、植村寛水の各氏ゲスト出演。○赤心流秋季琵琶、詩吟演奏会 十一月三日(日)朝十時静岡市城内県婦人会館、主催赤心流鶴翁氏。会員の外地元をはじめ関東関西の各流派琵琶名手数氏ゲスト出演。

あ 北海道有珠山の噴火、鹿兒島沖水良部島の台風、共に大きな御災難で心から御見舞申上げる。天災はいつ何ん時来るかわからぬ。琵琶も大事だがこの方の平常の備えも大切であろう。

昭和五十二年十月一日発行(非売品) 編集者 植村 稟 水 行所 高槻市津之江北町一ノ二番 電話 〇七三六(七三六)〇五一

琵琶 機関紙

京

結

第二八〇号 京 絃 社

山旅随想

日本歴史と琵琶を求めて

辻 旭 城



四季おりおり、筆者は山歩きとともに、あちこちの峠路を歩いてきた。目的の山に登り戦国時代の英雄の活躍ぶりを取材したときの満足感は格別であるが、若い人たちが云う峠歩きは、山登りのような登頂刹那の感激は湧かないかも知れぬが、峠自体の秘められた旅人たちの昔の哀歓を偲ぶことができ、山登りとは全く異った感傷を覚えるものである。

「信濃」という言葉のもつ響きは、何かしら素朴な美しさを感じさせる。海というものを全く持たず、我が国第一の山岳地帯である。信濃は北アルプスの南端に聳える乗鞍岳と、更にその南に山岳宗教で栄えた御岳が勇姿を競う。共に標高三千メートルを越す霊山である。野表峠はこの両山岳の鞍部に当り、峠頂上までは約千七百メートル。

明治の頃、信州の岡谷、諏訪地方は製糸工業が殷盛を極め、糸繰り工場の労働力である工女は飛弾の娘たちが多く、彼女らはこの野

表峠を越えて信州路に入り、盆、正月には飛弾に帰った。この間に多くの女工哀話が残されているが、作家山本義美先生著「あゝ野表峠」に精細に記され、以来世人から忘れられていた野表峠は一躍脚光を浴びるに至り、峠を訪れる人が急速に増えてきた。

筆者が野表峠を訪れたのは約十年の昔、信州松本から登ったと記憶する。川浦という村落までバス、あとは徒歩で旧峠道を辿って汗をふきふき頂上に到着した。道は迷うこともない一本道だが、登るに連れて道巾は狭くなり、頂上付近は笹が繁茂して、これがうら若い女工たちが足繁く通いつめた哀史に残る街道であったのかという実感が湧いてこない。

頂上で四、五人づれの主婦たちに逢った、他国者の筆者を見て、飛弾側の野表村落に村宿二、三軒が出来たから泊って、と奨められ、強行軍で疲労を覚えてきたが、元氣を出して目指す野表村に急ぐと、鎮守の森に教本

の轍りが掲げられているのを見てきた、お祭りのようである。村に入り村宿を訪ねて一泊を申込み「今日は年に一度の秋祭り、親類縁者のお客が泊るので宿は出来ません。」とあっさり断られ、次ぎの村宿も又同じように駄目である。途方に暮れてタクシーを呼ぼうとしたが、野表には電話が唯一軒しかなかった。

その家を教わって事情を話すと、その家の主婦は「折角峠を越してこの村宿を頼って来られたのに、お気の毒なこと、しかし今から(註)時刻は夕六時、既に日は暮れて来た。車を呼んでもいつ上って来るか判らない、うちも御覧の通り満員で……。ああそうだ、私の妹の家も何人かのお客がある筈だが、一人ぐらいいは何かなるうから頼んで上げました」と、娘に提灯を持たせ案内して呉れた。

その夜の夕食は、鄙びた山里の家で家族や親戚の泊り客と一語に、心尽しの山菜料理卓を囲んだ。雑談のさ中「先生は県の方から祭りの視察に来られたのですか」と尋ねられ些か面喰った。「実は大阪の者で、琵琶の機関紙、京絃の記者をしており、琵琶をやっている関係上、琵琶歌にゆかりの英雄等の取材に歩いています……。」

れた。七才の頃から近所の人に琵琶を習ったが、両親が無類の琵琶好きで、毎晩のように琵琶会に通うのに私も連れて行かれ、谷間の鶯の声のような琵琶の妙音に魅せられて、天王寺の琵琶の師匠に弟子入りをした。当時大阪には一流の琵琶師が肩を並べていた。私は若い男の師匠について厳しい芸の腕を磨き、五年後に教授の免状を貰ったが、当時の修業期間としては短い方で、高座で先輩の演奏を見習いながら、琵琶を膝上に構えて指を動かす練習を繰返し、難しいハメ物もマスターし、三十四才で念願の演奏会に出演出来るようになった。大正六年のことである。」

「その頃は立派な琵琶師が沢山いて、良い人もあったけれど、中には絃も歌もあんまり良くない人もありました。そういう人、会の時など私の方から一々合わせてゆかないければならないのが、一番辛いことでした。……記憶を辿り辿りして老婦人の昔話はいつまでも尽きなかった。」

翌朝同家を辞し、バスのある上ヶ洞まで約十キロの道を歩き出したが、村外れの小学校分校前まで来たとき、小型ダンブカーが通りかかったので、呼びとめて乗せて貰った。ところが、助手席に居る筆者は、ダンブカーが通るだけの道巾はあるが、益田川の深い溪谷に沿い山肌を縫って走る、所謂羊腸の道で急カーブするときなど、助手席から見るとタイヤが道からはみ出している感じで、命が縮む思いがした。

そのことを後で運転手に話すと「その通りですよ、一つ間違えばお陀仏ですが、しかしあなたよりも私自身の命が惜しいから、無理は決してしませんよ」と笑いながら話してくれた。

わが道を行く

六十五年(五二)

西郷 天風



その頃から、水戸市近郷の琵琶熱いよいよ高まり、演奏会も医師会館会議室の使用可能となつて以来、運営費が半減という好条件に恵まれ、我々の地元グループ以外にも二、三の集団が誕生し、それらの温習会が毎月催される有様となつた。

元来、此処は水戸黄門時代から琵琶に因縁深く、市内吉田郷の吉田神社には、彼の平忠度が預けたまま今日に至った琵琶があり、全体が虎の縞模様似ているところから、時の藩主烈公はいたくこれを愛で給い、虎琵琶と命名して愛玩し給えり、と今尚文献にあきらかである。更に、烈公は数面の琵琶を製作して水府琵琶と命名されたが、その中には二面の優れた作品があり、一面は常磐神社の宝物として今日に伝えられている。

あれは昭和四年頃だった、毎年の事ながら観梅の賑やかな行事も了えて早や五月ともなれば、次ぎは常磐神社の例祭である。そこで我々グループでは奉納琵琶会を思い立ち、とりあえず社務所に申込み、殊の外御満悦の小川速宮司は意外な相談をもちかけた。

「実はこの常磐神社の宝物に琵琶が一面あるのだが破損しており、宝物展に出品出来ずに困っている、何とかならぬものだろうか」ということであつた。

それから数日間この社務所に通い剥れた腹板の修理に当たったが、その折、意外なものを発見し、昔の人の心づかいに感じ入った次第だつた。

琵琶は、胴を掘って腹板を貼る場合、ふくらみをつけるため中央あたりへ横にソリ橋をかけるが、この琵琶は其処に金色あざやかな小さい幣束が立ててあつたのである。

これはおそらく、絃に音色を添えるための工作と思われたが、それから四十数年も経た今頃これと同様の琵琶を発見し、それがゆくりなくも水戸烈公作のもので、しかも優秀作二面の中の一面であつたとは、私にとって洵に縁は異なものであつた。

ところで、昭和四十七年の秋、あだかも七五三の祝祭日で賑わり静岡の浅間神社境内に森梅翁師一門の琵琶会があると聞き、久しぶりで浅間神社の祭拝をすませて演奏会場に行けば客席はすでに満員、折から竹下翠風師も姿を見せたので、立聞きを共にしながらステ

1ジを見ると、右手に何処か見覚えのある琵琶が客席に向けて飾つてある。

それは、少しも脹れの古風な形体が、どうやら水戸常磐神社の宝物を思い出させたが、やがて鈴木流泉師ら出演者の一部が社務所に引上げる折、例の琵琶は袋に納められ、流泉師自ら丁寧に持ち運ぶ様や、社務所でも我々とは別に表玄関へ廻るなど、大切な物であることを物語っていたが、はたせる哉、これは浅間神社の宝物であつた。

流泉師曰く「この琵琶は腹板が剥かれ、所々に修理を要する箇所もあつたので、結局数週間の奉仕となつた」とか、さすがにその道では本職も及ばぬベテランの流泉師が、得意の腕をふるっただけあって美事に完成、今日の祝祭日をトシ奉納琵琶を兼ねての催しとなったものだった。尚この琵琶は、その昔水戸烈公からの贈り物だったと云う。そこで私も昭和四、五年頃、水戸の常磐神社でこれと同様の琵琶を修理したことや、その時刻がれた腹板の内部に、金色サンゼンたる金の幣束が立ててあつた事など物語れば、流泉師いかに興味深げに眼をかがやかせて、ほお……この琵琶にも幣束が立っていましたよ、銀の幣束が……と。

これは紛れもなく常磐神社の宝物同様烈公作、逸品二面のうちの片方で、金、銀一対の幣束によつて姉妹品と見るべきであり、これで水戸と静岡の只ならぬ関係が偲ばれるのである。

かくて暫らく休息の後流泉師、その日の本番である奉納琵琶演奏が近づけば、舞楽殿の上には右手に宝物の琵琶を拝殿に向けて供えられ、その左中央には流泉師正座して琵琶を抱きおもむろに構えている。特に許されて舞楽殿上に座した我々は、何か心に緊張を覚えながら静聴すれば、流石にお得意の「名月逢坂山」はいよいよ演技の妙を発揮し、参詣の群衆も足音をひかえ声をひそめて、さながら周囲には人なきが如く、絃勢とみに牙え渡る有様は、神霊も快よく思召されたらるしであつたらう。

さて、これは内容の行きがかりで、昭和四年から一氣に中期近く飛ばして現代に続けてしまったが、昭和四年以後には未だ未だ特筆すべきものが幾多あるので、次ぎの稿から又元の四年に戻ることにする。

続・私の音楽ノート(九)

水藤 五郎

入門のこと

古来、稽古はじめは六才の六月六日からと云われています。これは飽く迄も芽出度いと縁起からの伝承であつたのですが、この時期が肉体的に大切な成長期であることは確かです。特に、耳の機能は、この六才をピークとして発育し、知能も向上期になって

時 十月二日(日)十一時開場
所 名古屋中小企業福祉会館
主催 阿部 勝水

秋の名流琵琶公演

琵琶芸術同好会その他の後援で
東西各流派名手多数ゲスト出演
(来聴 歓迎)

(予告欄参照)

時 十月三十日(日)昼十二時半
所 大阪西区民センターホール
主催 一水会大阪支部

故東 憲水 追悼 錦心流琵琶演奏会
故藤原英水

会員の外東京、大阪、神戸、京都の錦心流名手多数ゲスト出演
(来聴 歓迎)

いきます。

音楽の教育には早期教育が最適とまで、三才、四才の子供をピアノの前に座らせて母親が悦にいつている姿が流行しました。これもよく考えれば当然のことなのですが、その結果が判明するのが二十年後、即ち、ピアノス

トヤ、作曲家になることが出来る迄には、かなりの時を費さなければならぬわけですが、なんとも気の毒に思える流行で、子供にとっては迷惑な流行でした。

ピアノでもギターでも、習う気がさえなければ自由門をたたくことが出来ません。

この門にもいろいろあって、芸大教授の名ピアノリストから、現在勉強中の豆ピアノリスト迄無数であります。習う人々が無数であり、教える人々も無数であります。そして、更によく考えてみると、習う人々と教える人々が重複しているのであります。教え乍ら自分の技を伸ばす為めに、学び研究する人々が多いのです。こゝには教育システムがあり、高い芸術的伝統があります。

私の隣家に住むB子ちゃん、いや今は十五才になる「J」さんは、六才からピアノを習いました。毎朝七時半から八時半迄の一時間たどたどしい練習がつづき、それが私の目ざしにもなっていました。それは一つの流行でしたから、かなりの家がピアノを買いました。前の家、後ろの家、その奥の家と、同じ位の年頃の子がいましたから、一時期かなりさわがしかったのでした。が、今日残ったのは隣家のB子嬢だけでした。雨の日も、風の日も、毎朝練習がつづきました。彼女の成長がそのまゝピアノの音の向上に表われる様でした。そして、今春から、彼女は音楽高校に通うことになり、そのピアノの音は一段と冴えてきました。即ち豆プロになったのであり

ます。ここまでくるには、あの毎朝の練習が土台になっていました。

この様に記していると、我れ乍ら、自分の怠惰に恥かしさを覚えます。このB子さん程私は努力をしたろうかと考えると心が痛み、更に、そんな自分が存在しうる斯界の状況にも不安を抱くのです。B子さんはこうしなれば、今通っている音楽学校に入学出来なかつたのでしようし、毎日がつとまらないのでしよう。多くの競争相手と、指導する先生ともまれての練習であり、これからも続くのであります。

無数にある様に見え乍ら、きびしい条件を課せられての門叩きであります。本来、入門とはそのなかでも知れませんが。

私の教室に通ってくるKさんがこんな話をして呉れました。「私が琵琶を習いたいと思ひ、電話帳をめくり、琵琶人をさがした処、二人の方を見つけたので、早速ダイヤルを廻しましたが、相憎く一人は不在で、他の一人の方とお話することが出来ました。

入門希望の旨を伝えると、琵琶のことをよく説明し、いろいろの流派があるし、一度習い出すと、変わることが難かしいから、演奏会を聞いて自分の性に合っているか否か、その他、地理的、日時等の関係をも併せて考え上上で、ゆっくりと決めるのが良いと教えてくれ、とても有益であり、参考になり、後日それ等を併せて、錦に入門したわけでした。そのKさんは、入門後六年の今日

熱心 かつづいています。私はこの電話での入門説明に感心し、実当を得た指導だと思ひました。(この電話の主が竹下翠風師であつたことも附記しておく必要があるかも知れませんが、その指導は名言でありました。)

入門によって師弟はめぐりあうのですが、それが初心者である場合は、極めて重要な意味を含むこととなります。教える側は入門者の鑑定をして、その人の個性に合わせて教育しなければならぬのですが、現実には、教える側に近づけようと強いてゆくのが伝統的教育法とされてきました。ですから、習う側には教える人を観察し、選択することが許されません。一旦入門すると、師弟という絶対関係で結ばれてしまひ、身動きの出来ない状況に追い込まれてしまひます。一生の師との命題があつて、一生多師に依る教育システムがなかなか機能的に運用されてゆかないのです。この点から、入門時に於いて、この様な師弟関係に立つことのない、先人からの指導は適切であつたわけですね。

開かれた門であることと同時に、入門時にはそれなりの要綱と、指導が備えられている門でなければ、品格のある芸術の門とは云えないのでしよう。入学時に多額の寄附金が条件とされる門、それが成績を超越した現在では、正しい医学の門とは云えないのですから (この稿つづく)

青葉茂れる桜井の……

郡 恵 一



正成は最後ノ合戦ト思ケレバ、嫡子正行ガ今年十一歳ニテ供シタリケルヲ、思フ様有トテ桜井ノ宿ヨリ河内ヘ返シ遣ストテ、庭訓ヲ残シケルハ……。

ひとたびは成立したかに見れた「建武の中興」(一三三三―一三三五年)も、武士師の領袖足利尊氏(一三〇五―一三五八)の反逆により瓦解するところとなったが、朝廷方武将たちの奮戦の結果、尊氏らは止むなく九州さして落ちのびて行った。

しかし延元元年(一三三六)の五月、捲土重来を期した足利勢は、九州、四国、中国の軍勢約五十万を擁して水陸に分け、再々東上して来たのである。

この時、播州にあって官軍の総大将新田義貞は直ちに摂州へ進軍し、激戦を繰り出す。京へ急使を送って援軍を求めてきた。そこで朝廷としては早速楠木兵衛正成を召出して、義貞への救援出兵を命じた。だが正成は、雲霞の如き足利の大軍を真っ向から迎え撃つことの不利を進言し、彼独自の作戰構想を力説したものの、腰抜け公卿坊門清忠の

強硬な反対にあい、ただ一言「もはや、何の異議など申すことなし」と奉答したきり、五月十六日のうちに都を発ち出で、わずか五百余騎の手勢を率いつつ死出の旅路へと向うのだった。

「思えば河内の悪党(河内の国の強力な豪族の意)と呼称され、元弘元年(一三三一)九月十四日、後醍醐帝の勅諭を奉じて赤坂城に義兵を挙げてより、文字通りの神謀鬼略的戦法で、潮の如く寄せ来る鎌倉・北条勢を翻弄し続け、ひいては、全国的な反幕府軍の蜂起をうながすに至った彼・正成ではあった。

だがしかし、中興以降かつての盟友尊氏を仇敵にまわすに及び、彼の武士間における人望と政治、軍事力を高く評価し、その軍勢に真正面から立ち向うことの愚を熟知していた正成にとって、今回の出陣は生還など毛頭期すべくもなかつたのであつたろう。

途中、桜井の駅(現大阪府三島郡島本町字桜井)における嫡男正行との訣別対面(太平記巻第十六「正成兵庫ニ下向ノ事」は太平記全四十巻中のハイライトシーンであり、「青葉茂れる桜井の、」辺りの夕間暮……と

影い出される「湊川」の第一篇「桜井訣別」(落合直文詞・奥山朝恭曲)も、津々浦々に至るまで愛唱されるに及んだのであつた。そして、菊水の紋所と「非理法権天」の征旗をなびかせつつ、西国街道を兵庫は湊川へ急ぐ父正成。高浜の渡しを経て高野街道を河内金剛山麓へと帰りゆく子正行。戦前戦中

の懐かしの琴線にふれて、哀調味豊かな名歌の最終節はまささまと甦り来る……。

共に見送り見反りて
別れを惜しむ折からに
復も降り来るさみだれの
空に聞こゆるほととぎす
誰か哀れと聞かざらん
あわれ血に泣くその声を。

吉井良三

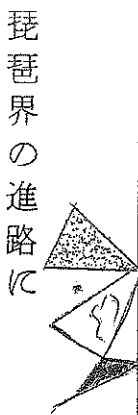
木曾路なる馬籠妻籠路み行きて
宿願果たしぬ 六十路を越へて
あげ初めて前髪の詩藤村の
叙情詩吾れを 若き返しぬ

滝原流石

頻打てば鼓の声かるく闇に落つ
巨き掌に樵夫の涙れし柴栗五合
山頂に佇てば秋空まだ高し
仏法僧月なき夜の声の主
一山の夜氣をあつめて木葉木葉
羽化 えて蜻蛉の待ちし朝の天

平井志鳥(洲歌)

琵琶置くや必死にうごく蝶の口
遠花火人のさだめの終るとき
蠅叩き置けば又来る蠅の顔
水中花卓上の無を解きけり
君子蘭言いだしにくき話なり



琵琶界の進路に ついての私見

柴田富山

「京絃」が、しばしば現代語の琵琶に深い関心を示してこられたが、特に今年の新年号でこれをうたったことに感銘を覚え、小生もいささか所見を申してみたくペンをとった次第であります。

小生が現代語基調の琵琶に思い当ったのは、昭和四十四年にお話琵琶(現正「津軽琵琶」と改称)として、八甲田遭難を扱ったレコード製作頃からですが、もともと私は、かつての琵琶盛んだった日のことを知っていますので、琵琶は邦楽としては浪曲、義太夫等と共に、最も大衆性のあるものと信じ込み、それが今衰えた形になっているのは、戦争中は、戦争への伴奏の一と役を買った観もあつたので、琵琶人達も一と頃を遠慮してゐるからに違いない、名流の方々が積極的に動き出したら、忽ち又盛んになるものとはばかり信じていたのですが、そのうちに皆さんが懸命に努力されているにも拘らず、再興出来ないうては「夢より一度」ということには、どうしたらよいか、と色々と思案するようになったのですが、これには矢張り何よりも必要

なのは、芸界を圧倒するような名人、ということが先づ考えられ、続いて思い当ったのは、小生の狭い視界ではありましたが、故水藤錦藤だったのでは。しかし、あれほどの創造力に於ても歌唱力に於ても天才であつた人が活躍されたにも拘らず、今や琵琶が世間一般から顧みられなくなっているのは、とも考えるようになり、この、ものの上手のほかのことで、今の琵琶界を阻むものは何か、と色々考えた末「現代語化」ということに気がつき、レコード、テープ類を作ったりしているのですが、然し現在では現代語化というくらいのもので、決して簡単に解決されないのである。この難解の要因は何か、「時代」という意味の知れぬ点まで考えざるを得ないのである。実感であつて、ここまで来ますといくらあせっても、もがいてもどうにもなるものでなく、今は却つて「どうすれば流れを変えることが出来るか」或いはそれが不可能であれば「どうすれば流れに乗って生き続けられるか」ということに、静かに心を向けながら、着実に努力をしてゆくより外に方法はない、と思ふようになりました。

(一) 当節は特に新傾向を志す人の多くなることが望ましい。現代の求めるもの、それは明かるとあり自由である。従つて歌詞もつとめて時代に密着した内容のもの。愛情ものも締め出さず、むしろ流行歌に負けぬ優れた作品を願いたい。勿論現代語の明かるとも当然考慮されることになる。殊にパターンに縛られ勝ちな琵琶では、伴奏の面でも勝れた歌曲、歌謡曲のメロデーをもとり入れ、或は創作して、つとめて近代風に、自由に明かると、心がけたいものである。

(五) レコード・テープ類は年に一、二回でもよい、京絃紙が曲名、価格など掲載の勞をとって頂けたらと思う。或いは作品の交換の便をでも計って下さつたら有難い。小生のように地方に居るものは、勉強の資料も欲しいのです。(一吟詩・津軽琵琶家) (註)本稿は数ヶ月以前に寄稿されたものですが紙面の都合で掲載ができませんでした。執筆者にお詫び致します。(係)

「大文字」を始め京の街々のネオン灯や街灯の消された中を五分置きに夜空をこがす西山北山の「左大文字」「妙法」「鳥井形」「船形」を見物し十七日名古屋を経て帰国された高松城、田中、白虎隊、牧、加藤清正、荒木、千曲川、植村、五條橋、梅原、七郎、馬場、聞けわだつみの声、大井、城山、伊吹。

の独奏などで人気上昇、終始満員の盛況を呈し六時終演。全二十七曲中主演奏は西郷隆盛、松井旭富、大橋公一、細川旭穂、北の庄、一坊寺旭澄、みどり、吉田旭昌、外三人、茶臼山、永井旭美(十四才)、戦艦大和、一坊寺旭清、鴨川の露、島田旭紅、高松城、田中、水、関ヶ原、会主矢吹旭美津(以下来賓)川中島、馬場、水、曲垣平九郎、菊地旭蘭、新撰組、梅原旭濤、城山、平井春嶺。

一水会神戸支部・蓮水会ゆかた会

七月三十一日(日)屋西宮市立夙川公民館(會長三浦蓮水女史)。金剛石、有志合奏、嵯峨野の秋、高原吟、吉野山懐古、木の宮、蓮尚、本能寺、村上蓮、堀田蓮、母常盤、吉田蓮、蓮葉、淀君、川上蓮水、新撰組、揚水、(以下来賓)川中島、金寄、清水、石童丸、小西、南水、乃木大将、木庭旭山、桐一葉、小川吟水、大和懐古、会主三浦蓮水。外に詩吟二十数題

錦心流琵琶演奏会

八月二十二日(月)夕五時半東京上野本牧亭、主催一水会本部企画部(七百元)。川中島、館谷六水、新撰組、藤川晴水、井伊大老、小林政水、狩野の雨、池上彌水、坂崎出羽守、青木草水、荒野の月、高杉花水、吹雪の敵、鈴木水、橋大隊長、杉山馨水、西郷隆盛、鈴木謙水、宮本武蔵、杉山旗水、白虎隊、二反田岳水、伊豆の御難、萩野甲水。

若手琵琶人の会第四回演奏会

九月九日(日)夕六時東京日本橋証券会館ホール(千円)。語り物音楽としての原典に戻って平家物語の探究に主題を置いたもので(薩摩)重衡、岩崎竜風(同)小督、清川風舟(錦)扇の的、高久穂芳(筑前)壇の浦、藤巻旭陽(平曲)木曾義仲、橋本敏江(薩摩)景清、山下晴楓、岩崎竜風(筑前)大物の浦、藤巻旭陽(錦)盛綱先陣、水藤五郎。(事務所)中野区大和町一ノ四四ノ一〇山下晴楓方)

大井錦淀氏入浴歓迎会

墓参を兼ねて八月十四日入浴の埼玉県大井錦淀氏は十五日田中鵬水氏の琵琶コレクションを観賞、翌十六日(火)京都琵琶協会の主催で矢吹旭美津女史宅に於て昼二時から歓迎茶話会を開催し伊吹正陽、馬場鴨水、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹、牧雨、荒木旭媛、植村翼水諸氏が出席し左記の通り弾交したあと近くのレストラン京みやこに席を移してビールで乾盃、夕食を共にして散会した。尚大井氏は同夜八時から東山に点火された精霊の送り火

筑前琵琶演奏会

八月二十八日(日)屋京都東山安井金比羅會館主催琵琶三美会(會長矢吹旭美津女史)。六才から十二才までの男女児九人がお伽琵琶、桃太郎、文福茶釜の合奏や単奏で拍手を受けた外新人たちの上達ぶりも素晴らしい又広島橋会や京都琵琶協会からの応援出演や一絃琴の名手大西一歌女史の「須賀」漁火

筑前琵琶演奏会

九月十一日(日)屋十一時東京日本橋第一証券ホール、主催東京旭会。小栗栖、中村旭典、衣川、若宮旭英、絃旭登、秋風故郷の山、藤内旭美、伏見の吹雪、福井旭花、山吹の夢、春日旭芳、大高源吾、樋口旭穂、壇の浦、岡田旭蓮、湖水渡、田中旭讓、お蝶夫人、松元旭川、絃旭鴻、舞扇鶴ヶ岡、齊藤旭邑、羅生門、仲川旭朋、絃旭登、誉の水馬、一峯旭孝、大森彦七盛長、渡辺旭寂、北の庄、吉田旭明、安宅の関、若宮旭登、石田三成、野田旭条、堅田落、大津旭紅、絃旭鴻、未練西行、原島旭粧、唐人お吉、藤巻旭鴻、大物の浦、押田旭窮。外に吟詠十八題。